令和４年度第３回鳥取県総合教育会議 議事録

１　日　時

令和５年２月８日（水）　午前１０時から午前１１時３０分まで

２　場　所

鳥取県庁　第３応接室等　オンライン会議を実施

３　出席者

知事　　平井伸治
教育長　　足羽英樹
教育委員　　若原道昭
教育委員　　佐伯啓子
教育委員　　鱸俊朗
教育委員　　森由美子
教育委員会事務局　次長　林憲彰
教育委員会事務局　教育次長　中田寛

有識者委員　石原太一
有識者委員　大羽沢子
有識者委員　永見真
有識者委員　福壽みどり
有識者委員　堀江愛
有識者委員　馬渕牧子
事務局　子育て・人財局長　中西朱実
　　子育て・人財局総合教育推進課　藤田博美

４　意見交換

『鳥取県の「教育に関する大綱」』の改定素案について

５　報告事項

令和４年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査及び鳥取県体力・運動能力調査の結果について

６　あいさつ

（中西局長）

・令和４年度第３回目鳥取県総合教育会議を開催する。開会に当たり、平井知事から挨拶を申し上げる。

（平井知事）

・本日は大変にお忙しいところ、ご参加いただき感謝申し上げる。
・本日は昨年に引き続き大綱の改定について議論させていただく。また、それに基づく政策の成案に向けた協議ということになる。
・前回以降の流れの中では、国において子ども家庭庁の設置に向けて大きく前進してきた。我々地方でも、現場からもそうした垣根を越えた対策づくりというのを求めてきたところであり、歓迎すべきことだと思うし、総理の施政方針演説、このたびの通常国会の冒頭でこの子ども関係の予算を倍増すると、これから

少子化対策など、それをいの一番政策課題にすると宣言された。

・岸田総理には、かねて鳥取県の子育てなど、お話をする機会に申し上げてきているところであり、そういう中で少人数学級など、鳥取県が非常に特徴的なことをやってきたことを政府の方からもご評価いただいている状況である。

・まだ子どもたちは、成長していく上で今非常に難しい状況にあると思う。コロナをどういうふうに乗り越えていったらいいのか。あるいは生活の貧困ということが拡大してきているのではないか。また、障がいのあるお子さんたちが数の上では増えてきている。

・ただ片方で、このたび、政府の調査でも明らかになったが、子どもの体力づくりでは、鳥取県は平均を超える子どもたちの姿が見えてきた。逆に学力では、昨年、全国平均を下回る状況に変わってきている。こういう実相を捉えて、今日、委員の皆様方、教育委員の方々も含めて、大いに議論していただき、これから近未来の教育づくり、子どもたちの未来づくりの大綱について議論したり、当面の政策についてお話をいただければありがたいと思う。

・先週か先々週か、かなり大きな雪が降り、２度にわたってＪＰＣＺ（日本海寒帯気団収束帯）がやってきて、雪が一面を覆いつくしたわけであるが、今週に入り暖かい日が続いて雪も解けてきた具合であろうかと思う。「雪とけて　村いっぱいの　子どもかな」と小林一茶が読んでおられるが、そういう元気な子どもたちの姿が村々に帰ってきている最近ではないかと思う。そうした子どもたちの未来をみんなで大人たちが保障していけるような環境づくり、是非ともその教育の観点でご議論いただければと思う。よろしくお願い申し上げる。

（中西局長）

・続いて、足羽教育長に挨拶をお願いする。

（足羽教育長）

・今回もオンライン開催となったが、皆様ご多忙の中、第３回総合教育会議にご参加いただくとともに、平井知事をはじめ、委員の皆様方には、日頃から本県の子どもたちの教育の推進に深いご理解とご協力をいただいていることに、改めて感謝申し上げる。

・新型コロナの感染も少し落ち着きを見せてきたところではあるが、今後卒業式、さらには入学式、あるいは入学試験等、今後も重要な学校行事や部活動の大会等が予定されている。子どもたちの健康管理や換気等の基本的な感染防止対策を徹底しながら、子どもたちの思い出に残る学校生活を創出して参りたいと思う。

・本日の総合教育会議では、次期「教育に関する大綱」の改定素案についてご意見を賜ることとしている。今、社会のニーズや価値観が多様化する中、そのニーズに応えるべく、本県でも国際バカロレア教育のスタート、あるいは、英語教育を含む学力向上の課題といった主体的な学びを作り上げていくことが求められているところであるし、３年目を迎えるＧＩＧＡスクール構想によるＩＣＴを活用した多様な学びの充実など、一人一人に寄り添い、誰一人取り残すことのない教育環境の整備が急務だと思っている。

・県教育委員会では、教育行政施策の基軸としてふるさとキャリア教育を設定している。このふるさと鳥取で生まれ育った子どもたちが、ふるさとに誇りと愛着を持ちながら自らの人生を主体的に切り拓いていく、そんな人材育成を図って参りたいと思っている。

・本日は限られた時間ではあるが、鳥取の子どもたちが自らの人生を夢と希望を持って未来に向かって主体的に生きていく、そんな力を育むため、委員の皆様方のご意見を賜りたいと思う。よろしくお願い申し上げる。

７　意見交換

（中西局長）

・意見交換に入る。本日の議題は、「鳥取県の『教育に関する大綱』の改定の素案」、報告事項として、「令和４年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査及び鳥取県体力・運動能力調査の結果」についてである。まず、「鳥取県の『教育に関する大綱』の改定の素案」について、総合教育推進課から説明をお願いする。

（藤田課長）

・資料５ページをお願いする。先の第２回総合教育会議において、令和５年度から８年度までの４ヵ年間の次期大綱の方向性についてご議論いただいたので、これを踏まえて素案を作成している。第一編は、４ヵ年を一つの区切りとした、これまでの取り組みを継承しながら、五つの柱を設け中期的な取り組み方針を示す。第二編は、令和５年度の重点取組施策と数値目標で構成するが、数値目標は現時点では未設定で、今後、教育委員会において策定する教育振興基本計画と整合を図りながら設定していく。また、施策は令和５年度当初予算について今後２月定例県議会において議論されるが、検討中の取り組みをもとに編成している。

・７ページから資料２として改定素案を添付している。第一編、９ページをお願いする。１の学校教育の柱では、児童生徒一人一人の学力や学力を支える力の伸びを把握し、わかる・伸びるに着目した学力向上策を学校全体で、学校組織が一体となって進めていくこと、そして、グローバル化に対応する英語教育の充実、海外留学の推進、国際バカロレア教育の展開のほか、まちづくりにも繋がる、地域と連携した県立高校のあり方の抜本的検討に取組む。

・10 ページの２の柱では、地域社会全体で子どもを育むことを念頭に、子どもたちが多様な世代の地域の大人たちと関わり成長していけるよう、コミュニティスクールと地域学校協働活動の一体的推進を加速するほか、ふるさとキャリア教育の推進、産業界との連携を深め、魅力ある企業や経営者を直に知り学び取る機会づくりなどを進めていく。

・11 ページ、３の学びのセーフティネットの柱では、本県独自の少人数学級の推進、不登校児童生徒が増加傾向にある中、学校以外の多様な学びの場、居場所の充実や、子どもたちの自己有用感を重視しながら、安心して学べる環境づくり、県立夜間中学の展開、そして教職員が子どもたちの指導に専念できる環境づくり、働き方改革を進めていく。

・12 ページの特別支援教育の充実では、一人一人の特性に対応し、個別の教育支援計画に沿った切れ目ない教育の推進、ＩＣＴ機器を活用した個別最適な学びの提供、学習機会の拡充や医療的ケア実施体制の充実、教職員の専門性向上に取組む。

・13 ページ、５つ目のスポーツ文化振興の柱においては、中学校部活動の地域移行に対応した、地域の実情に応じたスポーツ・文化活動環境の充実のほか、県民立の県立美術館を核として、アートを通じた学びを提供し、子どもたちをはじめとするすべての人がアートを身近に感じ、楽しめる環境づくりを進める。

・14 ページ以降は、検討中の重点取組施策案を掲載している。本日の議論や今後の予算状況を踏まえ、改めて次回６月に予定している会議において最終案をお示しし、委員の皆様のご意見を踏まえて、最終的に７月を目途に大綱を策定したいと考えている。

（中西局長）

・続いて、「令和４年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査及び鳥取県体力・運動能力調査の結果」について、教育委員会に説明をお願いする。

（中田教育次長）

・「令和４年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査及び鳥取県体力・運動能力調査の結果」について報告する。今ご覧いただいている資料は全国の調査を基にした全国との比較の表である。（２）は小学５年生の結果であるが、男女とも全国合計点が全国平均を上回っており、体力合計点の順位が令和３年度に比べて大幅に向上している。下の方には中学校の結果が記載されているが、中学校の男女とも、体力合計点、全国平均を上回っており、次のページをご覧いただくと、各項目で順位の上がったものが、男子は５種目となっている。経年で比較すると、本県として課題と捉えていた長座体前屈は、ここ数年の体育の時間における実践の積み重ねによって、小学５年生の男女とも過去最高であった。

・また、中学男子では上体起こし、シャトルラン、中学２年女子では握力、上体起こし、シャトルラン、50 メートル走、ハンドボール投げ等について、女子の場合は過去最低の記録も出てしまっている。これまで苦手としていた部分は改善が図られているが、お家芸としていたシャトルランなど、このコロナ禍によって部活動などの課外活動が制限されることで、回数が減少しているというふうに見てとれるところもある。

他の項目でも、全体的に体力の低下傾向に歯止めが効いていない部分がある。これもコロナの影響かと思う。

・また、ここのページには載っていないが、質問紙調査というものがあり、それによると、朝食を摂っていない児童生徒の割合も増えているというような結果も出ている。朝食を食べないこと、それから体力の低下、この相関等も今後研究をして、市町村教育委員会や各家庭とも連携しながら改善を図って参りたい。

（中西局長）

・それでは有識者委員の皆様から議題等についてご意見を伺いたい。石原委員にお願いする。

（石原委員）

・意見が２点、質問が１点ある。意見の１点目であるが、私は学力向上プロジェクトのチーム会議にも参加しており、鳥取県独自の学力・学習状況調査について、小学校中学校の間で一人一人の情報がちゃんとわかっていて役に立っているという話を聞いているので、高校の指導に関して鳥取県独自の学力・学習状況調査を活用できないかと思った。小中でデータをうまく使っていると思うのだが、これから情報が溜まっていくと高校生も使えることが出てくると思うので、具体的にこの鳥取独自の学力・学習状況調査を高校までどうやって使うのかというようなことも、一言触れたほうが良いのではないかと思った。

・それから２点目であるが、大綱の中にも社会のニーズに沿って力をつけてもらうというような記述があるのだが、実際に社会のニーズがどんどんがらりと変わっていく中で、やはりいろいろな力がある中にしても、今リスキリングが話題になっているところでもあるし、求められるものに応じてどんどん学び続けていく「学び続ける力」が何かしらの形で非認知能力の中の一つになるのかもしれない。「学び続ける力」を身に着けていくことについても議論していくのが良いと思った。

・質問であるが、大綱の第一編の中期的な取組方針には「情報・データサイエンス」の学びのことについて一言書いてあるが、第二編の具体の施策にはどこに書いてあるか。

（中西局長）

・質問等については最後にまとめてお答えする。続いて、大羽委員にお願いする。

（大羽委員）

・大綱の改定素案にはとても大事なことが網羅的に書かれており、具体的な実施案と繋がって実現されたら良いと思っている。

・その中で３点ほど、思い切った発想の転換のようなことについて、妄想のような話かもしれないがお話しする。

・１点目は少人数学級について、これも先進的な取り組みとして鳥取県ならではと思うのだが、一学級の人数を減らすということは定数が増えるということではないか。教員の定数が増えるとなると、学級担任制を複数にしたほうが良いのではないかという気がしている。大学を卒業したばかりの新任の先生が、いきなり４月に１クラス持つのは大変ハードルが高い。このご時世、辞める新任の先生方も増えているとなると、やはり定員数が増えた分、何とか複数で担任ができないか。例えばオランダのイエナプラン教育では、最初から複数担任制である。なぜそのようにしているのかというと、子どもと先生にも相性があるので、先生が２人になると相性の良い先生と出会う機会が二倍になるためである。そういう意味でも、少人数学級で一学級一担任という発想を思い切って変えても良いのではないかと思った。それから、それが働き方や教員の専門性の向上にも繋がるのではないかと思っている。

・それから学びを保障する場として、不登校の子どもたちが学ぶためのフリースクールなどがあるが、やはりそういうところは、そこにいる人たちの思いによりとても前向きに運営したり、或いは支援がある一定のものに偏ってしまったり、いろいろな課題があると思う。アウトリーチをしないとはっきり言われるところもあるし、発達障がいの子どもは受け入れないなど、疑問に思うことがいろいろある。そのため、やはりフリースクールなり、今作られているいろいろな学びの場を誰がどう評価してどういうふうに改善していくのかということを丁寧にやらないと、箱を作って運営しているが、その成果を誰も評価しないというようなことが起きているのではないかと思う。そのため、やはりそこはきちんとやっていただきたい。

・３点目として、先ほど石原委員がおっしゃったように、県独自の学力・学習状況調査から得られたデータ

など、とても良い教育的なデータを持っていると思う。その解析に専門家を１人加えたほうが良いのではないかという気がする。というのは、学力向上のポイントが何ポイント増えたとか何％増えたということが、本当に意味のある数字の差なのか、又は誤差の範囲なのか、精査した方が良いと思う。文科省も教育のデータを今後活用していく方針であると思うので、そういうものがきちんと引き継がれて行くようになると良いと思っている。

・皆さんはＣｈａｔＧＰＴをご存知だろうか。ＡＩが何でも質問に答えてくれるのだが、大変驚いた。そういうものが出てきた時代を子どもたちが生きるのだと思うと、何かこういうものをうまく作れる人間にしていかないといけないなと感じた。鳥取県メタバース課ができたけれど、やはり大きな時代の変化をもっと感じ取って先を見据えて、そこで活躍できる子どもを育ててもらいたいと思っている。

（中西局長）

・続いて、永見委員にお願いする。

（永見委員）

・大綱の改定素案について、国のコンセプトや施策、社会状況の変化等を勘案して本県の課題も盛り込まれており、内容的には良いのではないかと思う。ただ、素案のほとんどが学校現場によるところが大きく、以前より指摘されている授業改革、カリキュラムマネジメント、学力向上策、ＧＩＧＡスクール構想等々、様々な観点から、今後も公私の枠を超えた一層の情報交換であるとか、教員研修の機会をお願いしたい。

・そのような中で、令和５年度の重点取組施策の案の中に、教育の指導力向上に関する施策として、私立中学校高等学校における教員研修、教員研究等の取組への支援が盛り込まれており、非常にありがたい。よろしくお願いしたい。

・反面、危惧していることがあり、次世代を担う子どもたちを教育する側の、教員確保が非常に難しくなってきているようだ。もちろん県で採用される公立学校と自校での採用となる私ども私学とでは異なる部分もあるが、教育を担いたいと考える若者の減少は教育の危機にも通じるのではないかと思う。ふるさと教育との関連の度合い自体はよくわからないが、チームという点においては、人材の育成・確保が重要課題の一つではないかと考えられる。よろしくお願いしたい。

・また取組施策についても、学校現場のＰＤＣＡサイクルをしっかり回しながら、組織として丁寧に対応していくことが今以上に重要になるのではないかと認識している。

・様々な観点からご指導ご鞭撻をいただければ私ども私立も助かるので、よろしくお願いする。

（中西局長）

・続いて、福壽委員にお願いする。

（福壽委員）

・案を読ませていただき、改めて学校はすごいところだなと思った。自分は勝手に大人になったような気がしていたのだが、大勢の大人が子どもたちのことを思って、こんなにもたくさんのことを考え配慮しながら学校教育が進んでいるのだなと思った。

・大綱の改定素案の本文そのものについては、いずれも９ページであるが、本文３行目の「様々な社会的変化」というのは「乗り越える」というより「対応して」という方が良いかと思った。また、ＧＩＧＡスクール構想の注意書きのところに、ＧＩＧＡスクール構想の課題まで書かれているのが少し気になった。

・全体的なこととしては、多様性という視点で子どもの人間関係を考えたときに、小規模校と大規模校のどちらに多様性があるかというと、小規模校というふうに言われている。集う人々が多様なのはもちろん大規模校で、場としてはインクルーシブであるが、人間関係で考えると大規模校だと類が友を呼べる環境があって、小規模校は数は少ないのだけれど誰と誰が気が合うなどと言っていられない人間関係で、インクルーシブになると言われている。それで、「類は友を呼ぶ」の最たるものが、偏差値という観点で同質な人が集まる高校・大学で、だからこそ一生の友達が得られ易いのかもしれないなと思う。何が言いたいかというと、私たちは多様性を認める取組として、本来いろいろな人がいていろいろな人のあり方を認めながら、どうすれば多様な人が折り合いをつけながらうまくやっていくかを実践するような小規模校的な方式ではなくて、保健室登校やフリースクール、第３の居場所というような形で、困っている人たちのために

新たな場所を提供して、似通った人同士が集えるようにする、言うならば大規模校的方式を好んで選択しているのではないかと感じている。

・もちろん緊急避難場所として居場所がなくてはならないと思うが、結果いろいろな人が助け合いながら、認め合いながら暮らす社会を作るというような根本的な解決に至らずに、グループごとの分断を生んだり、どこにも属せないと感じたりする人を生むのではないかと思っている。先日知り合った人の子どもの不登校に関する悩みも、集団が苦手という言い方ではなくて、子どもがどこかに属することを苦手に感じているというものであった。

・また、今後ＡＩによる採点などの導入も考えられているようであるが、広島県教育委員会が行っている「ことばのたつじん」、「かんがえるたつじん」というテストは興味深いなと思っている。テストで子どもたちが間違えると当然「×」が付くが、このテストは子どもたちがどうしてそのような間違いをしてしまうのか原因に迫るもので、間違いが続くことで「どうせまた間違えるだろう」と学習に対する無力感を作ってしまうことが一番の問題だというふうに書かれていた。これをやってみてはどうかというわけではなく、こういったことを参考に、個別最適化のためにもどこで躓いたかだけではなく、どうしてそこで躓いているかという分析が大事かと思う。

・年明けに、子どもアドボケイト養成研修に参加した。大変すばらしい取組だとは思ったのだが、実際ロールプレイなどを体験しながら、困っている子どもが初めて会う、しかも多分１回しか会わない大人に、本当に感じていること言えるのだろうかと思った。１回の面談で何かを得たいのならば、言葉以外の多くの手がかりから子どもの状況を類推できる専門職にお願いすべきかと思う。ただ、継続的に面会ができるとか、本音は引き出せなくても、「あなたには味方がいるんだよ」ということが子どもたちに伝わればそれで良いということであれば、味方になれる大人は１人でも多いほうが良いかなと感じた。

・総合教育会議の場で話したことがあるかどうか記憶にないのだが、子どもたちが感情を覚えるのは、例えばおむつを替えてもらいながら、「気持ち悪かったね」、「ほら、気持ちよくなったよ」とか、離乳食を食べながら、「おいしいね」と言われたり、絵本を読んでもらいながら、「うれしいね」、「悲しいね」と言ってもらうことで、自分のモヤモヤした気持ちに言葉が付いてくる。これはこういう感情なんだと覚えていくのだが、そういった体験の少ない子どもは、言葉だけでなく、この感覚が何という感情なのかということも育っていないので、今求められる学力を付けていくところまで到達していない子どもたち、また家庭教育を期待することが難しい子どもたちに、まず付けていく力は何なのか、考えながら進めて欲しいと思った。

・子ども基本法もでき、「子ども真ん中社会」とか、「社会全体で子育て」と言われているが、自分の家族のことだけで、もっと言えば自分のことだけで精一杯の人が増えていると感じられる中で、なかなか難しいなと感じている。

・最後に、今回の総合教育会議もオンライン方式であるが、対面方式でできれば会議の前後にも雑談ができて、もっと楽しくできるのではないかと思っている。

（中西局長）

・続いて、堀江委員にお願いする。

（堀江委員）

・大綱の素案については、主体的に子どもが未来を開いていけるように、きめ細やかに、いろいろな角度から議論されて作られたものだろうと感じる。私が総合教育会議に参加させていただくようになってから、この大綱が現場の先生たちに共有され子どもたちにしっかり届くことが重要だと何度も議論されてきたかと思う。子どもの元に届き、子どもの未来に繋がると良いと、引き続き思っている。

・最近、学校って何だろうなあということが、ずっと頭の中にぶら下がっている。学校が何のためにあって、子どもたちにとってどんな場であれば良いのかということを立ち返って考えてみたい。現場の先生たちはどんなふうに考えているのかとか、子どもたち一人一人が学校をどんなところだと思っているのかな、ということがずっと頭の中にぶら下がっている。先ほど福壽委員も仰っていたが、もしこの総合教育会議が顔を合わせた会であれば、皆さんにお考えを聞いて共感できたと思う。そんなことを現場の先生にも尋ね

てみたいと思う。学校とは何かと考えることが、私たちが子どもと歩んでいく学校という場所を作っていく力になるのではないかと思っている。

・大綱の「はじめに」というところに、「子どもたち一人一人が自分のよさや可能性を認識するとともに」というくだりがあるのだが、そこでいうと、学校というものの良さや可能性が何なのかということを同じように考えていきながら、それを認識して日々の教育活動が実践されていくと、さらに学校の可能性が広がったり、それが子どもたちの可能性を広げていくことに繋がれば良いと願いを込めながら思っている。

（中西局長）

・続いて、馬渕委員にお願いする。

（馬渕委員）

・体力測定の結果が向上したということで、大変うれしく思っている。引き続きワンミニッツ・エクササイズ等の普及を図りながら、向上が図れたらと思う。

・その他、運動の視点で何点かお話をさせていただけたらと思う。最初のお話にもあったように、朝食が摂れていないお子さんがおられるということであるので、大人もそうであるが、健康づくりの三本柱「食事・運動・睡眠」が図られて初めて、生活習慣の確立、５番の「健やかな心と体の育成」に繋がってくるのではないかと思う。こういったことは、やはり家庭の協力が不可欠かと思うので、今こうして対面で会えない時期であるので動画で配信するなどしながら、家庭を巻き込みながら落とし込んでいく必要があると感じた。

・それから、５番の「健やかな心と体の育成、スポーツ・文化芸術の振興」の③「中学校部活動の地域移行を見据えたスポーツ・文化活動の充実」と④「トップアスリートの育成」に関することについて、昨日テレビで拝見したのだが、川口和久さんが鳥取県のスポーツ特別アドバイザーに就任されたということで知事も一緒に写っておられた。とても良いことだと思う。やはりプロのアスリートやトップアスリートの方と直接関わる機会が持てるということは、これからの部活動の幅を広げたりだとか、トップアスリートの育成といったところにも非常に繋がってくると思うので、野球のみならず、今後の中学校部活動の地域移行においても、そういったトップアスリートと触れ合う機会を増やしていくだとか、トップアスリートの発掘をしていくといったことが、非常に大事になってくるのではないかと思う。こういった活動をどんどん推し進めていって欲しい。また、教職員の方々の、例えば体育の授業でのスキル向上にも非常に役立ってくると思う。理論的なスキルばかりではないと思うので、そういったトップアスリートの方のコーチ力だったり、指導力だったり、教員のスキルだったりといったところの向上にも繋がってくるのではないかと思う。

・議題には含まれていないことであるが、不登校の生徒が多いということについて、そもそも学校に通いたくなるような仕掛けを作ったらどうかと思う。今まで当たり前にやっていたところを変えていくといった、抜本的な改革が必要なのではないかと思う。子ども目線に立った時、果たして行きたいだろうかと感じるところが、大人の私から見てもたくさんあると思っている。例えば大人でも、スーパーのタイムセールであるとか、人気ナンバーワン商品など、興味はないけれど行ってみようとか、見たい、聞いてみたいというようなことがあると思う。そういった仕掛けが学校にそこそこにあると、とても楽しいのではないかと思う。それが授業なのか、それとも先生なのか、または学校の内装だったり、外観だったり、制服だったり、体操服だったり。創立時からそのままというものが非常に多いのではないかと思う。やはりこれからの子どもは我々の世代と全然違ってくると思うので、子ども目線、子どもファーストで考えながら、快適な学校生活が送れる、イコール学校に通いたくなる仕掛けが必要なのではないかと、夢見ながら思っている。

（中西局長）

・続いて、教育委員の皆様からご意見をいただきたい。森委員にお願いする。

（森委員）

・本日は有識者の皆様にたくさんのわかりやすいご意見をいただいた。私も、これなら良いのではないかと一つずつ、頷きながら聞かせていただいた。感謝申し上げる。同感だと思うことも多々あった。

・私の立ち位置としては、女性ということは見ての通りであるが、子どもが４人おり、そして企業人として、33 年会社の経営をしている。日常から、いろいろな立ち位置で体感する機会が多い。先日、保護者の立ち位置で、ＩＣＴがどのように鳥取県の教育現場で使われているのかということを体感した。保護者の人権の会で、教育委員会の方にウェブで保護者の皆さんに話していただいたところ、本当に２年間で子どもたちがＩＣＴを活用していることに驚いた。そして私たちがその保護者の人権の会を開催する際も、今までなら「保護者の皆さん、音を出さないように」とアナウンスしていたのが全く逆になり「保護者の皆さん、携帯をお手元に」とのアナウンスから始まり、「ＱＲコードをかざしてください。今からスタートのアンケートを取ります」ということで保護者がパチパチとＱＲコードにより操作し、そこでアンケートを 10 秒 20 秒の間にとり、瞬く間に円グラフとなって、その時の保護者の状態を把握した上で保護者の会がスタートした。教育委員会の方が、「子どもたちはこういうことを日々やっております」ということもおっしゃったところ、多くの保護者の方々から「こんなところまで来ているんですか」というようなご意見が非常に多く、私も保護者の立ち位置として聞かせていただいた。
・何をお伝えしたかったかというと、この３年間、コロナ禍で「知る機会」、「繋がる機会」が教育現場においても非常に激減したということを痛感した。時差のようなものを感じた。これから分析をして、次の一手、何を最初にしなければいけないのか、そしてどんなゴールを目指さなければいけないのかということを考える上でも、そして子どものキャリア教育という意味では、企業も子どもたちが今どんな学びをしてどんな進化を遂げているのかということを知り、繋がることがとても大事だと痛感した次第である。
・皆様のご意見でそういったことがお聞きできたので、これらを教育現場のこの大綱の中にもたくさん生かしていければと教育委員の立場として感じた。この大きな変化を、ピンチはチャンスとして、返ってこの小さな県の小回りの利く本当にすごい機動力を発揮して、みんながどの立ち位置からでも交わっていく、繋がっていくということをこの機会にぜひ実現したいと感じた。

（中西局長）

・続いて、鱸委員にお願いする。

（鱸委員）

・今後、教育委員会の中で議論するテーマとして、非常にわかりやすいご意見いただいた。各部門において検討していかないといけないなという気持ちでいる。
・私は障がい児との関わりが非常に多い状況の中で、今の教育委員会の中でもいろいろな意見を出させていただいている。そういうことで、この大綱の中で「一人一人に寄り添い多様なニーズに対応した特別支援教育の充実」というところを熟読させていただいた。その中で、三つほど意見を述べさせていただきたいと思う。
・一つは、この特別支援教育ということの理解が、まだまだ保護者に理解されていないと感じる。それは例えば幼稚園から小学校に行く、中学校から高校に行く際の就学支援会議の中で、専門的に見たときに、子どもさんの能力とか資質とかそういうものの評価の中でなかなか難しいと、就学支援員の大半が難しいのではないかと思っていても、親の気持ちであろうか、通常の学級を選択することがある。そういう方を多かれ少なかれ受けないといけないのが今の教育現場だと思っている。もう一つ言えば、例えば知的な遅れのあるお子さんとか、或いは情緒障がいを持たれた自閉傾向があるお子さんたちが高校に行く。それが、いわゆる支援学校への進学が少なくなって、一般高校に入学しているという傾向があるように思う。そういう中で、やはり受け入れる側も、現場の学校単位の中でそういう子がいる、それに対してどういう配慮が必要かということも、今後検討していかなければならないのではないかと、気になった。
・二つ目に、そういう障がいを持ったお子さんの教育というのは、子どもの発達の正常化を目指すのではなくて、子どもが持っている困り感を支援していくというところに大きな問題があると思う。支援するときに子ども中心なのはもちろんであるが、障がい児の支援は保護者支援と両輪であるという考えの中で、保護者支援をどうあるべきかということも、大綱に入れられた方が良いという気持ちでいる。
・そして少し気になったのが、柱の４に「障がいの早期発見と相談支援の充実にあたります」とあるが、厳密に言えば、早期発見したらその子どもの特性内容を評価するための診断がいる。その診断に対すること

が一言あっても良いのではないかと思った。

・それから、障がいを持ったお子さんを一番正しい方向に教育していく、或いは環境づくりをしていく上で、保護者の障がい受容が早くできるということが一番大切である。そのためには、その次の相談支援の中に、やはり一言、子育てに繋げるとか、或いは教育に繋げる相談支援というような、生活部分と教育部分とを一緒にしたような方向性の対応がないと、子どもたちの特性の適用が、なかなか難しいのではないかと思っている。

・最後に、ＩＣＴのお話も出ていた。確かにメタバース環境などのＩＣＴ環境の充実は、障がい児、特に重症になればなるほど、その子どもたちの持っている資質の評価に非常に役に立つと元来から言われている。そして、こういうものに対してＩＣＴを利用しなさいというような国の基本方針の中で、ＩＣＴを利用して子どもの困り感、学習障がい、読み書きが駄目ならば、例えば、読んでくれる音が出るようなもの、そういうものでその子どもの持っている本質の良さを伸ばしていくためには、ＩＣＴへの予算をしっかりつけていたくことが必要である。そして、ＩＣＴの環境整備はできたが、ＤＸ、いわゆるフォーメーションの段階まではなかなかいけないので、段階的に研究がしっかりなされることが必要だと思う。

（中西局長）

・続いて、佐伯委員にお願いする。

（佐伯委員）

・本日は有識者委員の皆様に大変貴重な、柔軟な発想に基づくご意見をいただき、感謝申し上げる。

・私の考えを述べたいと思う。まず一つ目に３の「誰一人取り残さず、すべての人の可能性を引き出す学びの環境づくり」について感じていることである。現在、学校や学級の中で、生活に不適応を起こして安心して過ごせない、不安を感じているというような児童生徒が増加傾向にあると思う。自信が持てない、友達や先生との良好な関係が築けないなどで孤立してしまいがちになっている。周りの児童もそういう子どものことを個性と捉えたりして、気にならないというようなことにもなると、自身の存在意義が感じられなくて、学校生活が空虚なものになってしまう。そこで、心の教育を充実していかなければならないと思っている。本人の心に自己肯定感や自己有用感を育むようにすること。それから周りの友達の様子に気づき行動しようとする、また自分自身が無意識の偏見を持っていないか自己を振り返って見られるような、そういう学びの場を設定して欲しいと考えている。心の教育は計画的に教育課程の中に位置付けながら、スクールカウンセラーの方と連携して取り組みを進めていくべきだと思っている。各学校では、カウンセリング週間などと言い、一人一人の児童生徒の困り感に寄り添う実践が増えていると思うが、心を耕したり、自分自身の心を見つめたりする、そういう時間を設けることと合わせて行うことで、一人一人の大切な命について、考えたり受け止めたりするという学びの機会を作って欲しいと願っている。スクールカウンセラーと担任との協働とか、外部講師を招いての講義とか、より児童や生徒の心に届く内容になるように工夫することが必要になると思っている。また、中学校の卒業者とか高校の中途退学者等で、進学や就労をしていない生徒への、関係機関が連携した働きかけ、声かけを続けて欲しいと思っている。

・次に４番の「一人一人に寄り添い多様なニーズに対応した特別支援教育の充実」についてであるが、現在、特別支援教育の一層の充実が望まれる状況である。通常の学級の中に特別に支援を必要とする児童生徒が多くなっているからである。本人の自分理解を進めながら、周りの児童生徒が個性として認め、ともに生きるという気持ちが持てるような関わりの場を設定していかなければならない。できるだけ小さいときからそういう環境の中で学んでいくということで、先ほど鱸委員も言われたような、高校になって一緒になった時にも、やはりともに生きていくという気持ちが持てる関わりができるのではないかと思っている。そのためには、校内の支援体制の確立とコーディネートする主任のスキルが求められる。また、医療的ケアを必要とする児童が小学校等で生活するのに、看護師の配置が不可欠になる。看護師と担任の協働をどう進めるのかというようなことを支援センターで助言し、要請に応じて学校訪問をするというようなことを続けてくださると、児童がより安心して生活できる場になるように思っている。今は、通常の小学校にも医療的ケアを必要とする児童が入ってきているので、やはりこれはすごく重要になってきているなと感じている。

・また、発達障がいのある児童生徒については、なかなか希望しても通級指導が受けられないというような状況にもあるので、ＬＤ等専門員や通級指導教室の担当者の養成を強く希望する。それから中学校から高校に進学した際の支援を必要とする生徒の引き継ぎを丁寧にすることや、高等学校の特別支援教育コーディネーターの配置が大切になると思っているが、やはり校内の特別支援教育に対する教職員の理解とか熱意とかということがまず根底になければならず、それで学校体制が整っていくと思っているので、研修を計画的に随時続けていって欲しいと思っている。

（中西局長）

・続いて、若原委員にお願いする。

（若原委員）

・次期大綱の改定素案の第二編が１から５まであるが、その内容について順番に気づいた点を申し上げる。

・まず、１の「主体的に学び持続可能な社会の創り手を育む学校教育の推進」であるが、その中に④として、「教員の指導力の向上」という項目が挙げられている。教員の研修制度を充実させるということはもちろん大変重要なことではあるが、その前に、全国的な教員不足が言われている中で、教員の採用について、量的、質的、安定的な教員の確保を図ることが課題であると思うので、そのことについても少し触れた方が良いのではないか。

・３の「誰一人取り残さず、すべての人の可能性を引き出す学びの環境づくり」の中の⑬に「学校における働き方改革」という項目がある。教職員というのは、確かに子どもにとっては人的環境の一つであるから、この環境の項目のところに働き方改革が含まれているというのはわかるのだが、私としては、１の④「教員の指導力の向上」の項目に働き方改革も一緒にまとめて、教員の採用、そして研修など、働き方改革を一つの項目としても良いのではないかと思った。

・１の⑨「地域に根差した魅力ある学校づくり・県立高等学校の在り方検討」については、今、今後の鳥取県の方向性等の在り方を決めるような大きな議論に差しかかっていると思うので、次期大綱の中で大変重要な課題の１つであると思っている。

・２の「社会全体で子どもを育み地域や家庭で学び合うふるさとキャリア教育の推進」について、④「コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進」と⑤「学校、家庭、地域の連携・協働の推進」のところで、コミュニティスクールとか或いは学校、家庭、地域の連携協働というような内容が述べられているが、ここに中教審の方で使われている「各ステークホルダーとの対話あるいは連携」という、そういう言葉が使われているとわかりやすいのではないかと思った。

・２の⑦「生涯学習・社会教育の推進」のところで、生涯学習という言葉が出てきているが、ここで使われている生涯学習という言葉は少し範囲が狭いように思う。もう少し範囲を広げて、リカレント教育やリスキリングにも触れて、大人自身の学び直しの機会を広げるということについても触れるべきではないかと思う。

・３の「誰一人取り残さず、すべての人の可能性を引き出す学びの環境づくり」、４の「一人一人に寄り添い多様なニーズに対応した特別支援教育の充実」ところでは、学びのセーフティネットづくりの拡大と、内容の充実が着実に進められているということが実感できて良いと思った。

・３の⑪「安全安心で環境に配慮した学校施設整備の推進」という項目があるが、その中で、例えば学校で太陽光発電によって電力を賄うといったような、カーボンニュートラルやＳＤＧｓを子どもたちが具体的に体験できるような工夫はできないものかと思った。

・最後に、５の「健やかな心と体の育成、スポーツ・文化芸術の振興」のところで、令和７年度に鳥取県で総合文化祭が開催されることについて述べられているが、同じ令和７年に高校総体も開催されるので、高校総体の準備に着手するというようなことについても触れなくて良いのかという気がした。

（中西局長）

・続いて、足羽教育長にお願いする。

（足羽教育長）

・有識者委員の皆様方、そして教育委員の皆様方から貴重なご意見をたくさん賜ったことに心から御礼申し

上げる。私の方から総括的に、特に有識者委員の皆様方から出たご意見について回答したいと思っている。

・まず、石原委員から、とっとり学力・学習状況調査の有効活用という観点で、高校でも活用していけばどうかという意見があった。テスト自体は高校では実施されていないので、テスト自体の実施は難しいのだが、県の学力・学習状況調査の考え方、個人の伸びであるとか、非認知能力の状況、これを引き継いでいくことは可能ではないかと思っているので、検討させていただきたいと思う。

・そして、「学び続ける力」の重要性もご指摘いただいた。その通りである。今、小中高すべての校種で地域課題を中心とした課題探究、探究学習をしている。これを継続的にキャリアパスポートを通じて持ち上げていく仕掛けもあるので、この「学び続ける」ということを意識した思考判断表現の力の育成に今後も努めていく。

・ご質問のあった情報データ関係については、資料の 14 ページに触れている。資料の 14 ページの②「学力向上策の推進」のところに「分析シート」という言葉がある。これがこの学習状況調査で把握できる児童生徒の学力レベルや、或いは先ほど申した非認知能力等、これらの調査結果を集積して、複数年、分析シートとして可視化できるようにしていく。そういう仕組みで積み上げ、そして継続性のあるものにしていきたいと考えているところである。

・大羽委員から、少人数学級を推進する上でも学級担任、複数担任制はどうかというご指摘をいただいた。教員定数の関係から、なかなか教員を一気に増やすことは難しいのだが、今、教科担任制の小学校への導入に向けて取組を進めている。担任プラス教科指導を行う者、複数の目が子どもたちに関わることによって、少人数学級の成果もまた一層意義のあるものになるのではないかと思う。

・また、フリースクールに関わる人々の思いについてもご指摘いただいた。県教委では毎年フリースクールと支援に関係していらっしゃる方々との連絡会を持っているので、そこでの子どもたちの様子を学校現場にも持って帰れるような仕組みになっている。今後も、フリースクールでの学習状況等もしっかり把握しながら、一貫性、そして連携をより深めて進めて参りたいと思う。

・永見委員から、公私の枠を超えた教員研修についてお話いただいた。公私問わず、鳥取の子どもたちに必要な指導、それは教員の資質向上も然り、ぜひ一緒になって今後も取組を進めて参りたいと思う。

・ご指摘いただいた教員確保の難しさは、公立も全国も然りであるが、今、島根大学、教育委員会と連携しながら、『「未来の教師」育成プロジェクト』を展開し、普通科高校の生徒たちを中心に、教員志望の生徒たちが実際に大学に出向いて学んだり、オンラインで研修交流をしたりというふうな種まきも進めているところである。こうした地道な取組を、少し時間はかかっても、中長期的な視点で大切な教員の人材育成確保に努めて参りたいと思う。

・福壽委員から、多様性という、今本当に重要視されているお言葉をいただいた。困り感のある子どもたちが集まれる場所、本年度は５校であったが、中学校において校内サポート教室という、学校には行けるけれど教室までがなかなか行けない子どもたちが集まれる場所を作り、指導員がそこに入りながら、教科指導というよりも相談体制を構築することで、その中で同じ境遇にある子どもたちの人間関係ができて、一歩踏み出せたというふうな好事例も出てきているところである。こうした取組は市町村の方でも入っているところもある。来年度はぜひこれを拡充しながら、そうした子どもたちの居場所、さらにはｅラーニング教材を使った学習で繋がるという取組も県内３地区で進めているところであり、子どもたちが何らかの形で人同士が繋がる取組を進めたいと思う。

・広島県のテストの例をご指摘いただいた。また私どもの方でも研究してみたいと思うが、どこでどうして躓いているのか、ここが一番大事なところであり、とっとり学力・学習状況調査がそこに有効に機能していくものだと思うので、そこの分析をしっかりすることで、その子の躓きやその子の伸びをしっかりと認めて励ます、そしてまた、道筋を見つけていく、そういうことに取組んでいく。

・堀江委員からは、学校とは何かという本当に大きな根本的な課題をご指摘いただいた。改めて子どもたちにとってどんな場所であるべきなのか。これは教員として長年教育に関わってきた私たちこそが、まずもう一度立ち返って考えるべきことではないかと思っている。その理念が子どもたちに届くために、前半ご指摘いただいた現場の先生にこうした大綱、或いは教育基本計画が届くことが大切だというのは、本当に

ごもっともなことであり、これが絵に描いた餅にならない、現場の先生に届き、子どもたちに応じた取組の意図が伝わることに、今後も尽力していく。

・最後に馬渕委員から、朝食と健康に関してご指摘をいただいた。家庭の協力の必要性、大切さ、本当にごもっともであり、今回の報告を受けたときに私もいの一番に言ったのはこの朝食のことであった。食べるという人間にとっての基本的な部分が欠けていれば、それは運動にも学習にも大きな影響をもたらす。その上では家庭の協力は必要不可欠だと思うので、ここは県のＰＴＡ会、それから高等学校のＰＴＡの方にも、こうした状況をしっかり分析しながらお伝えすることで家庭啓発を図って参りたいと思っている。

・後半、不登校のことについて、学校に通いたくなる仕掛けが必要というご指摘もいただいたところである。子どもたちにとって魅力ある学校であるために、私は３点考えている。１点目は子どもたちにとって安心できる空間、そして人がいるということ、心の安心感がいかに創出できるかということ。そしてそのために、２点目は自分のことをわかってくれる、理解してくれる人の存在。これは先生もそうであろうし、友達関係。そして３点目が、やはり「できた」、「わかった」という学びの保障が学校にあること。それプラス制服であったり、校則であったり、様々なその学校の環境が寄与してくるのではないかと思うが、まずはそうした根本・中心になる３点の構築に向けて今後も検討を進め、より有効な施策に繋げて参りたいと思っている。

・たくさんのご意見をいただいたことに、改めて感謝申し上げる。一つ一つが今後の鳥取県の子どもたち、ウイズコロナ、或いはアフターコロナを見据えながら、子どもたちのより健やかな成長に繋がるような施策につなげて参りたいと思う。

（中西局長）

・最後に、平井知事に挨拶をお願いする。

（平井知事）

・本日は、こうして有識者の皆様、そして教育委員の皆様から、大変に熱心なご討議をいただき、示唆をいただいたことに本当に感謝申し上げたいと思う。今、足羽教育長が総括されたが、具体的な大綱の最後のファイナライズ、仕上げについては、皆様の今日のご意見を踏まえて若干の修正をしながら最終版とさせていただければと思うので、ご理解を賜ればありがたいと思う。

・例えば、学力状況調査などのデータの解析やその活用というようなこと、或いは多様性、そういうものを現場としてもよく考えた上で教育を展開すべきだ。特にお話があったのは障がいのある子どもたちが順次進学し、通級指導が一般化してくる中で、時勢としても重度な心身障がい児が学校現場に入ってくるということがある。そのようないろいろなことも含め、多様な子どもたちをすくすくと育てていけるような、そういう教育の現場作りについてもお話があったところである。

・また川口和久さんの話もあったが、体力づくりや子どもたちのスポーツなど、そうした技量を伸ばしていける、そういう環境が必要であるとか、また教員の確保、或いは働き方改革、こうしたことにも詳細な配慮が必要であるというようなご意見もあった。今日は各般に渡るご意見をいただいたが、いずれもおっしゃる方向性は妥当なものだと思うので、しっかりと、これからの教育行政に活かしていただけるように、私ども執行部としても教育委員会サイドと調整させていただきたいと思う。

・令和２年度、３年度、４年度と、学校にとっては試練の３年間だったと思う。今コロナの状況も大分変わってきており、今年に入ってオミクロン株が主流になってきている。そういう中、子どもたちの間で感染の急拡大が実際に起きている。片方で、重症化の度合いは変わってきているとも分析されている。政府の方に知事会でも呼びかけているが、こういう教育のことも含めて、オミクロンについてそれに即した対策に変更していくべきではないかと求めているところ、今、急速にこの環境づくりが行われようとしている。そういう手応えも出てきた。おそらく新年度に入ると、今日皆様にご議論いただいた大綱や、或いはいろいろな施策、これを反映するような形で、本格的に子どもたちの学びの場を改めて整理していくことになるのではないかと思っている。

・いよいよ国際バカロレア教育も倉吉東高校で始まる。或いは夜間中学も見えてきて、一つ一つ展開が図られるところになってきた。ぜひ委員の皆様に置かれては、これからも高度な見識、或いはいろいろな専門

的な知見、また現場の声を教育の方に注入していただくよう、改めてお願い申し上げたいと思う。子どもたちの豊かな育ちをお祈り申し上げ、お礼とさせていただく。

（中西局長）

・以上を持って、令和４年度第３回鳥取県総合教育会議を終了する。